

セルフエフィカシー育成の手法を用いた、 学習意欲向上の授業づくり

大所眞吾 (大阪教育大学教職大学院)

1. 目的

本研究の目的は、自信をもって活動に取り組むことができるような学習意欲を学校教育活動内の取り組みで向上させることである。その際にセルフエフィカシー（自己効力感）を学習意欲の指標とし、一般性セルフエフィカシーの値の上昇を目指した。

2. 研究方法

1) 対象者：

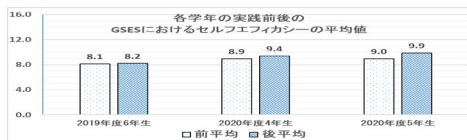
大阪府内 S 小学校所属の小学生 計 182 名

2) 調査方法：一般性セルフエフィカシー尺度 (GSES) など

3) 分析方法：IBM SPSS ノンパラメトリック検定、ウィルコックスンの符号順位和検定(有意水準 5%未満)

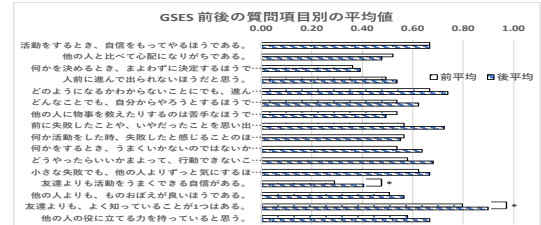
3. 結果と考察

1) GSES の結果より、3 度にわたり 6 年、4 年、5 年の 3 学年に対する実践における子供たちの一般性セルフエフィカシーの値は 0～16 点のうち、前後でそれぞれ 8.1、8.9、9.0 から 8.2、9.4、9.9 と上昇したが、有意な差は見られなかった。



2) 3 学年の授業実践前後のデータの総計における一般性セルフエフィカシーの一要素である「能力の社会的位置づけ」の値は特に大きく上昇し、有意な差が見られた。さらにその要素を構成する質問項目である「友達よりも活動をうまく行える自信がある」「友達よりも、よく知っていることが1つはある」の値が大きく値が上昇し、有意

な差が認められた。



- 実践後には、子供たちの間に以前には見られなかった人間関係が見られるようになったり、運動の苦手な子供が自分や他の子供の成長に気づくことができたりなど、データには表れていない変化も担任教員や子供たちから聞くことができた。
- 一方、GSES のその他の 2 つの要素、「行動の積極性」「失敗に対する不安」の値の有意な変化が見られなかったため、普段からの子供たちの積極的な行動の価値づけや失敗を許せるような学級の雰囲気づくりなどが必要だと考えられる。

4. 結論

本研究では、セルフエフィカシー育成の手法を用いた体育の授業を行うことで、セルフエフィカシーの一要素である「能力の社会的位置づけ」を向上させることができた。つまり、今回のようなセルフエフィカシー育成の手法を意識して体育の授業を行えば、子供たちの一般性セルフエフィカシーの値を上昇させることができ、学習意欲を向上させられる可能性が示唆された。

5. 主な参考文献

- 坂野雄二・東條光彦,『一般性セルフ・エフィカシー尺度 作成の試み』,1986.
- 柴山直・小嶋妙子,『児童の学習意欲に関する研究—自己効力感との関連について—』,2006.